

“ノ”ちゃんとその一家 5匹がくれた喜びと驚き… 開始して3年たって



札幌支部 札幌太田病院 太田 耕平

名犬? “ノ” がやっ
て来た。彼女の周りには外
来者や看護職員の和やか
な輪になった。看護職員
達の大喜びも犬介在療法
開始の理由でもある。好
評なため、今では犬一家

5匹に増えた。この間の
妊娠・出産・哺乳・育児
など犬一家の触れ合いと
成長は誠に微笑ましいも
ので、犬のやさしさ、犬
同士の遊び、人の心を読
み・自分の役割を知る賢
さなどを学んだ。人間の
脳のどこかに、犬と付き
合い《安心と自信》を得
てきた長い歴史が刻まれ
ていると感じた。

ピカソは彼の絵画《慈
悲と科学》両者の協調の
意義を表現している。犬
が可愛いと感じる中に、
赤子が可愛い、生命の共
感、生きる意味、相互扶
助、宗教性、倫理性など
を育ててくれることが治
療効果の背景かとも考え
た。「十牛図」ならぬ十犬
図を想像してみたりする。

仔犬が4カ月になると
歯が母の乳房に痛みを与
え、母犬は仔犬から逃げ
て離乳が自然に起こる様
子を目近に見て、最近増
えている母子分離が困難
な母子に説明しやすくな
った。

外来、各病棟で不登校
児、多動児からご老人ま
でに愛されている。退院
後、犬に会いたくて来院
する児童例も少なくない。
…症例をあげてみたい…
Aさんは「死にたい」
と自傷や壁に頭をぶつけ
る40歳代女性患者。小犬
を近づけると拒否せず犬
を引き寄せ犬は患者の顔
をなめていた。数日後興
奮はおさまり拘束を解除
できた。看護職員にとっ
て驚きと大喜びであり、

有効性を確認して北海道
病院学会に発表した。

Bさんは70代女性。心
氣的で好褥的、拒否や頻
回の要求、排泄介助など
看護の手續を要していた。
小犬を始めは拒否し「シ
ーシー！」と追い払って
いたが、尾を振って近づ
くと防衛的に上半身を起
こした。そして4〜5分
後には「来てくれるのは、
あんただけだよ」と犬
を抱き寄せ、20分後には
ベッドから降りて遊びだ
した。看護職員もこれに
は大喜びとびっくりであ
った。7日後、好褥性が
とれて施設に移動できた。

Cさんは不登校と自傷
で入院した中学生。ウソ
が多くて看護職員に「ウ
ソをつかないと生きてい
けない」と絶叫した。朝
6時から子犬と散歩して
信頼関係が出来て内観療
法へ。病院から通学を実
行して退院し自宅から通
学可能となった。

Dさんは高校生。不
登校と摂食障害で来院
し、内観療法を一応終了
していた。子犬を膝に乗
せゆっくり撫で涙を流し
ていた。涙の理由を聞き
たい衝動にかられたが、
清楚で感動的なシーンで
近寄りが見たい。2日後に
なぜ涙を流していたかを
聞くと、覚えていなかった
たので少したって再度た
ずねると、「仕合わせだっ
た」と答えてくれた。

仔犬が育む《仕合わせ》
感を共有させてもらい、こ
ちらも仕合わせであった。